The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	集中治療室に勤務する新人看護師の早期自立に向けた教育と支援：先輩看護師が求める報告・連絡・相談から
Author(s)	今村, 佐知子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101867
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　今村佐知子　）	
論文題名	集中治療室に勤務する新人看護師の早期自立に向けた教育と支援：先輩看護師が求める報告・連絡・相談から

論文内容の要旨

【背景】看護基礎教育修了後看護師免許を取得し，交代制勤務を有する医療施設の各部署に配属された新人看護師は，先輩看護師の指導のもと日々の看護ケアを実践している。しかし，看護基礎教育においては，医療の高度化や医療安全に対する意識の高まりなどの背景から，臨床現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で習得する看護実践能力との間に乖離があることが指摘されている。この状況下においても，集中治療室には，毎年新人看護師が配属される。看護ケアの質や医療安全を維持しつつ，看護師の負担を軽減し働き続けられる職場運営のためには，新人看護師が真に自立するまでの長期的な教育とともに，早い段階から一人の看護要員として働けるようになるための教育や支援が求められている。

【目的】急性期病院の集中治療室に配属された新人看護師が，早い段階から責任を持って一定の看護業務を遂行できるようになるための教育内容と支援体制を見出すことを目的とした。

【方法】先輩看護師８名を対象に，新人看護師が自立して働くために必要と考える報告・連絡・相談の具体例について半構造的面接を行い，質的分析を行った。

【研究１】新人看護師が早い段階から支援を求めてでも実施すべき基本的スキル

〈結果〉新人看護師が早い段階から支援を求めてでも実施すべき基本的スキルは，多くの教育プログラムで学習項目にあげられているものと一致し【中心静脈ラインケア】【血行動態ラインケア】【脳神経領域の侵襲的処置ケア】【呼吸ケアと評価】【人工呼吸器装着中の管理】【脳神経領域の侵襲的処置ケア】【重症患者の評価】【疼痛管理と鎮静評価】【患者の安全管理をふまえたケア】であった。

〈結論〉新人看護師が早い段階から先輩看護師に支援を求めることで，患者の安全を確保しながら実施すべき基本的スキルが確認できた。

【研究２】新人看護師が一人の看護要員として認められるための言動

〈結果〉先輩看護師が，新人看護師を一人の看護要員として認めるために求める言動は，【状況理解に基づく積極的言動】，【緊急度に応じた報告】，【業務遂行状況の報告】，【メンバーシップに基づく言動】，【高度治療のリスクをふまえた言動】であった。

〈結論〉日々新人看護師に看護ケアを指導している先輩看護師の実体験に基づく語りをまとめることにより，「必要時や異常時は報告・連絡・相談してほしい」と臨床現場で表現される実例を分類し，一人の看護要員として認められるための具体的な言動を提示することができた。

〈まとめ〉高度な知識と技術が求められる集中治療室では，焦点化した教育を提供することで，新人看護師の早期自立が促進できると考えられた。また，どのような言動ができれば自立とみなすことができるか具体的な場面として聞き取ったことで，抽象的な表現を明確に示すことができた。これらを整理し統一することで，効果的に新人教育を行うことが望まれる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　今村佐知子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	井上智子
	副 査	教授	樺山舞
	副 査	教授	武用百子

論文審査の結果の要旨

看護基礎教育においては，医療の高度化や医療安全に対する意識の高まりなどの背景から，臨床現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で習得する看護実践能力との間に乖離があることが指摘されている。この状況下においても，集中治療室には，毎年新人看護師が配属される。看護ケアの質や医療安全を維持しつつ，看護師の負担を軽減し働き続けられる職場運営のためには，新人看護師が真に自立するまでの長期的な教育とともに，早い段階から一人の看護要員として働けるようになるための教育や支援が求められるため，それを目標とした教育内容と支援体制を見出す必要がある。

臨床現場で実際に日々の看護ケアを指導する先輩看護師８名を対象に，新人看護師が自立して働くために必要と考える報告・連絡・相談の具体例について半構造的面接を行い，質的分析を行った。その結果，【研究１】では，新人看護師が早い段階から支援を求めてでも実施すべき基本的スキルを抽出することができた。ICUにおける教育プログラムはすでに各国に多数あり，ICU看護に必要なスキルも示されている。しかし，すべてを網羅した教育プログラムでは，新人看護師が，先輩看護師の支援を受けながらでも一人の看護要員として働けるレベルまでを目標とした教育としては時間がかかりすぎる。本研究により，まず優先的に，新人看護師が早い段階から支援を求めてでも実施すべき基本的スキルを抽出することができた。この結果を用い，新人看護師の自立を目標として焦点化した新人教育ができると考えられた。

【研究２】では，新人看護師が一人の看護要員として認められるための言動を抽出した。これは，先行研究で新人看護師の独り立ち基準のひとつにあげられている報告・連絡・相談の抽象的な表現を具体化することで，新人看護師及び先輩看護師が共通認識できる行動レベルで示すことを目的とした。日々新人看護師に看護ケアを指導している先輩看護師の実体験に基づく語りをまとめたため，より実践的な結果が得られ，「必要時や異常時は報告・連絡・相談してほしい」と臨床現場で表現される実例を分類し，一人の看護要員として認められるための具体的な言動を提示することができた。この具体例をさらに改良することで，評価指標として用いることができると考えられた。

以上より，本研究は集中治療室に勤務する新人看護師の早期自立に向けた教育と支援を明らかにし，看護教育に貢献する重要な知見を示しており，博士（保健学）の学位に値すると評価できる。